シミュレーション演習① 手洗い指導

～シミュレーションから学ぶポイント～

シミュレーション後，目標に基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：手洗いの意義を子どもたちに伝えることができる。

・手洗いの意義を理解することができる。

→手洗いは日常生活習慣であり，清潔に保つことは身だしなみのひとつである。また，感染予防として重要な意義があり，食事前，トイレ後，外出後などに手洗いする目的を理解し，習慣づけるようにする。

目標②：子どもたちに正しい手洗いの方法を身につけさせることができる。

・正しい手洗いの方法（テキスト p. 8，図１－３参照）

・石けんと流水による手洗いの方法が実施できる。

→十分な石けんの泡を使って洗うこと，流水でしっかり洗い流すことが重要である。

・洗い残しやすいところを説明することができる。

→しわやくぼんでいるところは汚れが残りやすい。手のひら，つめ，親指のまわり，手の甲，指の間，手首などは特に気をつけて洗うことが重要である。

目標③：発達段階に合わせた指導の工夫ができる。

・発達段階に合わせた指導ができる。

→清潔習慣の自立の目安として，およそ２歳半で手を洗う，４歳で歯磨き，うがい，顔を洗う，鼻をかむ，５歳で髪をとかす，お風呂で身体を洗うなどがあげられる。一人一人の発達段階を見極めて，自立した手洗いが難しいようであればいっしょに洗う，手を添えるなどの手助けを行う。

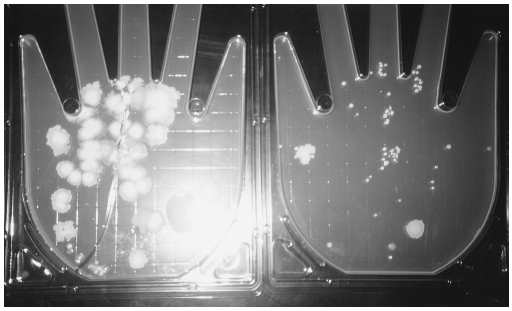
・楽しんで学べる工夫ができる。

→紙芝居や絵本，動画などといった教材の工夫や，歌やダンスの活用など伝達方法の工夫，手洗いチェッカーやコロニー培養などの機材の活用などによって，子どもたちが興味関心をもち，楽しんで学べるような内容にするとよい。

日本ユニセフ協会の世界手洗いダンスの動画

花王株式会社のあわあわ手洗いのうたの動画

手洗いチェッカー



手洗い前後のコロニー数の変化
（ビデオによる指導を受けた５歳児）

（参照）

・日本ユニセフ協会：世界手洗いの日プロジェクト

・花王株式会社：あわあわ手洗いのうた

シミュレーション演習② 嘔吐物処理

～シミュレーションから学ぶポイント～

シミュレーション後，目標に基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：感染症疑いのある嘔吐物処理の実践をすることができる。

・嘔吐物処理について正しく実践できる。

→処理する人は使い捨てのエプロン・手袋・マスク等を正しく使用し，防護すること。感染性のある吐物を正しく処理し，集団感染を防ぐ。廃棄物を正しい手順で処理すること。処理が終わったら，最後に手洗い，うがいをして自分が感染しないように心がける。

・消毒薬を使用する製品の濃度を確認の上，用法・用量に従って使用することができる。

→次亜塩素酸ナトリウムはすべての微生物に有効であり，原液濃度が６％の製品を使用する場合は，下表に従って希釈し，用途・用量に合わせて使用すること。また，次亜塩素酸ナトリウム消毒薬の希釈液は，時間が経つにつれ有効濃度が減少するため，つくり置きは望ましくないことに留意する。

消毒対象	調整する濃度（希釈倍率）	希釈法
・糞便や嘔吐物が付着した床 ・衣類等の浸け置き	0.1% （1,000ppm）	水１Ｌに対して20mL （めやすとしては，500mL ペットボトルにキャップ２杯弱）
・食器等の浸け置き ・トイレの便座，ドアノブ，手すり，床等	0.02% （200ppm）	水１Ｌに対して４mL （めやすとしては，500mL ペットボトルにキャップ0.5杯弱）

（出典　厚生労働省：保育所における感染症対策ガイドライン（2018年改訂版），p. 69，2018）

・保育室の環境の整備を正しく行える。

→嘔吐物処理を行っている間は保育室を閉め切り，処理が終わったら換気を行う。床だけでなく，ドアノブや壁，床やおもちゃなども消毒することが望ましい。

・○○ちゃんが衣服などを汚してしまった場合の対応ができる。

→汚染された衣服は感染源にもなり得るため，そのままビニール袋などに二重に入れて密封する。保育施設では処理できないこと，正しい消毒方法を説明して保護者へ返却する。

目標②：下痢，嘔吐の症状がある子どもの対応をすることができる。

・下痢をしている子どもに適切に対応できる。

→下痢の処理をするときは，マスクやエプロン，手袋を着用する。食事の量を少なめにし，消化のよい食事にする。お尻がただれやすいのでこまめに清拭する。診察を受ける場合はおむつを持参するために保存しておく。

・嘔吐をしている子どもに適切に対応できる。

→うがいのできる子はうがいをさせ，できない子は口の中に残っている吐物を取り除く。繰り返しの嘔吐がないか様子をみる。寝かせる場合には嘔吐物が詰まらないように顔を横向きにさせ，脱水症状に注意する。

目標③：他の子どもへの適切な対応ができる。

・他の子どもへの感染を防ぐための対策ができる。

→嘔吐したらすぐに他の子どもを遠ざけ，嘔吐物処理を行う間は全員を別の教室へ移動させる。また，できる子には手洗い，うがいをさせたり，健康観察による体調不良者の早期発見に努め，集団感染の発生を防ぐことに力を入れること。

（参照）

・厚生労働省：保育所における感染症対策ガイドライン（2018年改訂版），2018

シミュレーション演習③　救命手当―睡眠中の事故への対応

～シミュレーションから学ぶポイント～

シミュレーション後，目標に基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：睡眠中の事故防止のためのチェックを行うことができる。

・睡眠中の事故を防ぐために，顔がみえるように仰向けに寝かせる，０歳児は５分毎，１歳児以上は10分毎に観察するなどのチェック行動がとれる。
・睡眠中でも必ず誰かが保育室内で見守るなどの役割を果たし，園児だけにならない環境づくりができる。
・寝かせ方に配慮することや，やわらかいふとんやぬいぐるみなどを使用しないなど，安全な睡眠環境を整えることができる。
・部屋は暖めすぎない。

目標②：他の職員との役割分担を含め，救命手当を行うことができる。

・呼吸をしていないことに気づき，発見者は緊急時の役割分担に基づいて，他の保育者に応援を頼んだり，リーダーは的確な指示を出せるなど，職員間での連携がとれる。
　→緊急事態に気づいたら，他の保育者を呼び応援を頼む。リーダー（施設長など）は救急車の要請，保護者への連絡，心肺蘇生や AED の依頼，記録，他の子どもの対応や救急車の誘導などの役割を指示する。
・119番通報として整理された情報を適切に伝える。
・保護者への連絡として必要な内容を適切に伝える。
・救急車の誘導が的確にできる。

目標③：救命手当を的確に実践することができる。

・初期対応として，応急手当ができるように場所を確保する。

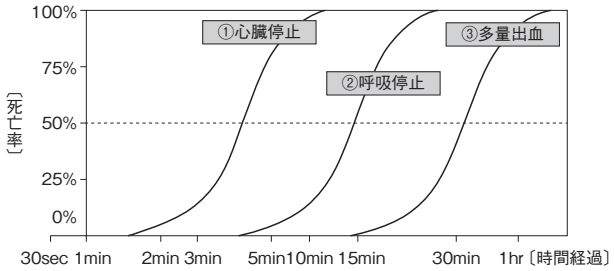
→午睡中の他の子どもを移動させて，手当を行うスペースを確保する。

・すぐさま救命手当の行動をとることができる。

→カーラーの救命曲線では，心臓が停止してから３分が経過したときと，呼吸が停止してから10分が経過したときに，それぞれの死亡率が50％になることを示している。このことからもわかるように，いかに早く救命手当を行うかが，生命保持の鍵となっていることを確認する。

・確実な心肺蘇生法が実施できる。

→胸骨圧迫，気道確保，人工呼吸の正しい方法について確認する。

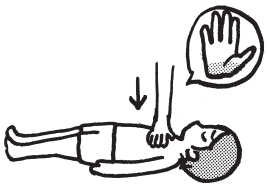


カーラーの救命曲線（Cara, M., 1981）

★注意事項

○胸骨圧迫

幼児は，片手または両手で胸の厚さの約1/3くぼむ程度，乳児は，中指と薬指で胸の厚さの約1/3くぼむ程度，押し下げる。圧迫のテンポは成人と同じで１分間に100～120回のリズムで行う。



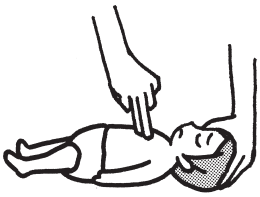
幼児の場合

○気道確保

子どもの首は柔らかいので，後方に傾け過ぎないようにする。

○人工呼吸

肺容量が少ないので，吹き込む量の目安は，子どもの胸が上がるのがわかる程度にする。



乳児の場合

（参照）

・内閣府：教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン【事故防止のための取組み】～施設・事業者向け～（平成28年３月），2016

・日本蘇生協議会：JRC 蘇生ガイドライン2015，2015

シミュレーション演習④　救命手当―プール活動中の事故への対応

～シミュレーションから学ぶポイント～

シミュレーション後，目標に基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：救命手当を的確に実践することができる。

・プールから○○ちゃんを引き上げ，固い水平な場所に寝かせて救命手当を行う準備ができる。
　→水に濡れたままでは体温が下がったり，AED のパッドを装着することができないので，身体をバスタオルで拭く。
・すぐさま救命手当の行動をとることができる。
・確実な心肺蘇生法が実施できる。
・他の子どもたちの誘導を的確に行う。
　→他の子どもたちに不安や動揺を与えないように速やかにその場から移動させる。

目標②：プール活動における役割分担を理解し，役割に基づいた行動がとれる。

・プール活動における保育者の役割分担を明確にできる。
　→あらかじめ見守る人（監視者），子どもたちといっしょに遊びに関わる人，緊急時に対応する人などの役割を決めておくことが必要である。
・監視者の役割を理解し，監視者であることを示すための工夫ができる。
　→監視者は監視に専念すること，監視はプール活動エリア全体をくまなく見渡すこと，動かない子どもや不自然な動きをしている子どもをみつけること，規則的に目線を動かしながら監視すること，持ち場を離れるときは他の職員と交代するなどの役割を確認する。また，腕章や帽子，ゼッケンなどを着用することで，誰がみても監視者であることがわかるようにする。

目標③：保育施設の緊急時対応について理解し，適切な行動がとれる。

・保育施設における緊急時の役割分担を明確にできる。

・119番通報として整理された情報を適切に伝える。

・保護者への連絡として必要な内容を適切に伝える。

・救急車の誘導が的確にできる。

（参照）

・内閣府：教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン【事故防止のための取組み】～施設・事業者向け～（平成28年３月），2016

・日本蘇生協議会：JRC 蘇生ガイドライン2015，2015

シミュレーション演習⑤　救命手当―食物アレルギー児への対応

～シミュレーションから学ぶポイント～

シミュレーション後，目標に基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：食物アレルギーのある子どもの症状からアナフィラキシーだと判断できる。

・食物アレルギーの症状について，的確な観察ができる。

→食物アレルギーは，特定の食物を摂取した後にアレルギー反応を介して皮膚・呼吸器・消化器あるいは全身に生じる症状がある。また，じん麻疹などの皮膚症状，腹痛や嘔吐などの消化器症状，息苦しさなどの呼吸器症状が複数同時にかつ急激に出現した状態をアナフィラキシーと呼ぶ。その中でも，血圧が低下し意識レベルの低下や脱力をきたすような場合を，アナフィラキシーショックと呼び，直ちに対応しないと生命に関わる重篤な状態であることを理解しておく。今回の事例では，息苦しさ，腹痛，吐き気，じん麻疹などの症状から食物アレルギーによるアナフィラキシーであることに気づくことが重要である。

目標②：アナフィラキシーの緊急時対応ができる。

・アナフィラキシーショックを想定した対応がとれる。

→アナフィラキシーショックによる血圧低下を起こさないように，適切な場所に足を頭より高く上げた体位で寝かせ，嘔吐に備え，顔を横向きにする。意識状態や呼吸，循環の状態，皮膚色の状態を確認しながら必要に応じて救命手当を行う。

・アナフィラキシーだと判断し，緊急時の対応をとることができる。

→保育施設において，アレルギー疾患を有する子どもに緊急性の高い症状がみられたら，エピペン® の使用や119番通報による救急車の要請，AED の準備など，速やかな対応をすることが求められる。

・職員の役割分担の明確化がなされている。

→全体管理や発見者による子どもの観察，エピペン® 投与の準備，救急医療機関・施設長・保護者等への連絡，記録などの役割が必要である。

・エピペン® を正しく使用することができる。

→本人が打つことができないときは，保育者が代わりに投与することが必要である。マニュアルに基づいた適切な使用方法により，確実に薬剤を体内に注入することが求められる。

・エピペン® 投与から救急隊到着までの適切な対応ができる。

→エピペン® 投与後も，救急隊が到着するまでは観察と見守りが大切である。薬剤によって一時的に症状が回復したとしても，急な血圧低下を防ぐために，体位を変えずに寝かせたままの姿勢を保つことが重要である。

目標③：他の子どもへの適切な対応ができる。

・他の子どもたちに不安や動揺を与えないように速やかに他の教室への移動ができる。

（参照）

・厚生労働省：保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（2019年改訂版），2019

・環境再生保全機構：ぜん息予防のためのよく分かる食物アレルギー対応ガイドブック2014，2014

・日本学校保健会：学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン（令和元年度改訂），2019

シミュレーション演習⑥　災害訓練

～シミュレーションから学ぶポイント～

（参考）時間配分

グループ分け（５分）→役割分担・シナリオに沿った練習（15分）→発表→振り返り

シミュレーション後，目標にも基づいて実践したグループメンバーや見学者などと意見交換をして情報共有をしよう。

目標①：適切に子どもを安全に避難させることができる。

・以下の流れに沿って避難させる。

〈事例１〉

① 緊急地震速報

② 安全の確保：窓から離れる！　身体・頭を守って（ダンゴムシのポーズ），防災頭巾を被り，安全な場所で揺れが収まるまでじっと待つ

③ 避難を実施：非常時持ち出し袋持参，子どもの誘導，施設の火元など安全確認

④ 避難場所に集合

⑤ 安否確認

⑥ 保護者への連絡（子どもの無事の状況と避難場所，引きとりの連絡）

〈事例２〉

① 火災報知器

② 安全の確保：姿勢を低く！　避難ルートの誘導。

③ 避難を実施：非常時持ち出し袋持参，子どもの誘導，施設の火元など安全確認

④ 避難場所に集合

⑤ 安否確認

⑥ 保護者への連絡（子どもの無事の状況と避難場所，引きとりの連絡）

目標②：他の職員と役割分担を含め協働して取り組むことができる。

災害対応役割組織表の体制を整備し，所内に掲示し，限られた数の職員で子どもたち全員の安全を確保しなければならないため，給食職員は乳児保育のサポートに入るなど，自分の任務・配置を熟知しておくことが大切である。また，園長や主任の指示を復唱したり，複数担任の場合には声を出して行動したりしてお互いの行動を確認し合うようにする。

目標③：地震時，火災時の避難のポイントについて理解できる。

・地震時；揺れているときには，安全の確保が重要。窓から離れる！日常から保育の場のセーフティゾーンを決めておく。身体・頭を守るダンゴムシのポーズが有効。揺れが収まるまでじっとする。避難場所に集合のときには，防災頭巾など頭を守って「お・は・し・も（おさない・走らない・しゃべらない・もどらない）」の指導を。

・火災時；火災が発生したら，非常ベルを鳴らし，子どもたちに避難を促す。可能な初期消火に努め，至急119番へ通報する。保育者はクラスの子どもを落ち着かせ，煙が充満する前に，決められた避難通路を低い姿勢で，床を這うようにして（可能であればタオル等で鼻口を覆い）避難誘導する。窓，戸は閉めておく。限られた数の職員で子どもたち全員の安全を確保しなければならないため，給食職員は乳児保育のサポートに入るなど役割分担を明確にしておく。

●評価のポイント（担任として避難誘導１～４，５は救出・救護班，消火班）

	地震時の避難訓練	火災時の避難訓練
1．安全の確保はできたか	できた・できなかった Point： ・子どもへの声掛けをする。 ・窓や倒れる恐れのある家具から離れる。 ・身体・頭を守る（ダンゴムシのポーズ）。 ・揺れが収まるまでじっと待つ。 ・子どもたちを落ち着かせる。 ・ヘルメットあるいは頭巾をかぶらせる。 ・靴（上靴）を履く。必要に応じて防寒具・雨具を着用。	できた・できなかった Point： ・子どもへの声掛けをする。
2．避難の実施は適切か	できた・できなかった Point： ・非常時持ち出し袋（リュック）持参（背負う）。 ・出口の確保。 ・園児誘導。 ・決められた場所を通って避難。 ・施設の火元等安全確認。	できた・できなかった Point： ・非常時持ち出し袋（リュック）持参（背負う）。 ・出口の確保。 ・煙が充満する前に姿勢を低くして床を這うようにして避難。 ・園児誘導。 ・適切な場所を通って避難。
3．避難場所に集合	できた・できなかった Point： ・決められた場所，適切な通路を通り集合できたか。	できた・できなかった Point： ・決められた場所，適切な通路を通り集合できたか。
4．安否確認	できた・できなかった Point： ・整列させ，子どもの点呼・安全確認をする。	できた・できなかった Point： ・整列させ，子どもの点呼・安全確認をする。
5．役割分担に応じた役割遂行 ・救出・救護班 ・消火班	できた・できなかった Point： ・各保育室等の避難もれの確認ができたか。	できた・できなかった ・各保育室等の避難もれの確認ができたか。 ・初期消火に努めることができたか。

＊シミュレーション演習

●〈事例１〉〈事例２〉の時間設定を変更しいろいろな場面を想定する。場面に応じた必要な態度や行動をとることができることが，園児の安全につながる。

〔園外散歩中〕

・通常の保育者の人数＋１人以上であることを想定して対応を考える。
・日頃よりお散歩マップを作成し，危険か所や災害時の避難場所を把握しておく。
・可能であれば地域の人たちにも協力を仰ぐ。
・以下，テキスト p. 119，表7－8　地震時の対応「園外にいた場合」に準じる。

〔プール中〕

・プールからあがるよう指示をして，スリッパをはかせ，子どもを園舎から離れた決められた場所に誘導する。
・以下，テキスト p. 119，表7－8　地震時の対応「園庭にいた場合」に準じる。

〔昼寝中〕

・避難訓練は，実際には困難であると思うが，実際にどのような行動をとるのかについて職員間で話し合っておく。午睡時の訓練をするときには，子どもの睡眠が短くなることを事前に保護者に伝え，その日は早めに就寝させてもらうなどの配慮が必要である。
・２歳未満児のしっかりと歩けない子どもの準備についても対応を話し合っておく。
・揺れを感じたら，布団・毛布で身体を守る行動をとる。
・昼寝のままの姿（パジャマ）で避難する。
・以下，テキスト p. 119，表7－8　地震時の対応「保育室にいた場合」に準じる。

〔延長保育中〕

・保育者の人数が少なく，正職ではなく臨時職員やパートなどさまざまな勤務形態のものがいることが想定される。いろいろな形態の職員にも共通の認識で避難訓練をしてもらうこと。
・異年齢の中での子どもの動きに注意し，避難するときは年長と年小のペアをつくる。
・いつもの保育室とは違い，延長保育の保育室からの決められたルートであることに注意する。

・「避難靴」や「歩けない児用のおんぶ紐」が，通常の保育室ではないことから準備されていないことが多いので，どのようにするのかについて話し合っておく。
・以下，テキスト p. 119，表7－8　地震時の対応「保育室にいた場合」に準じる。

（参照）

・天野珠路：園の避難訓練ガイド，かもがわ出版，2017
・経済産業省：想定外から子どもを守る保育施設のための防災ハンドブック，2013
・国崎伸江：園防災まるわかり BOOK，メイト，2016